

第7 部会

じて、宗教団体が時代に合致しようとする努力、そして新メディアの利用を通じて自らの最新性 (up-to-date-ness) を確保するという現象に注目した。しかし、宗教とメディア及び商品化との関連を通じて宗教は「公的存在」となり、「大量性」の領域に入るが、大量消費社会のニーズに応じようとして、宗教は単なる「宗教的エンターテインメント」へと変化する危険性もあることを示してきた。

ここまで述べた問題点については、宗教とメディアとの関係のみならず、現代社会の一般的なダイナミクスをより理解するために、宗教学の視点からのさらなる研究が必要であろう。

宗教心理と浄土真宗

林 智 康

「宗教心理学」について、堀江宗正氏は『歴史のなかの宗教心理学』（岩波書店）と「現代思想と宗教心理」（島蘭進・西平直編『宗教心理の探究』東京大学出版会）で述べている。

この考えは、従来の聖と俗、出世間と世間という区別を超えて、人間が神や仏のはたらきまで手に入れてしまうことになる。すなわち心理学が宗教の役目を果たことになるのである。宗教者である牧師や僧侶はこれをどうとらえ、どう考えるべきであろうか、早急に宗教者は宗教と心理学の接点について深く研究する必要がある。

国連のWHO（世界保健機構）の理事会では、今から十年前の一九九八年から一九九九年にかけて、一九四〇年代から続いている「健康」の定義を改正しようとした。「健康」の定義とは、（一）身体的に健全である physical （二）精神的に健全である mental （三）社会的に健全である social という、フィジカル・メンタル・ソーシャルの三つの要素が入っている。すなわち体と心と人間関係の健全を述べている。しかしこれでは人間の健全を十分表現していないという考えが強まってきたので、四番目に「スピリチュアル (spiritual) に健全である」という言葉を追加し、総会にかけようとしたところ、総会では全会一致をめざしていたので保留になってしまった。ところがその後「スピリチュアル」あるいは「スピリチュアリティ」の言葉が時代の流れとともに、最近はよく使われている。

また鈴木大拙は「ただ宗教についてはどうしても霊性とでも云ふべきはたらきが出て来ないといけないのである。即ち霊性に目覚めることによって始めて宗教がわかる」（『鈴木大拙全集』第八巻 岩波書店）と、宗教と霊性について言及していることに注目したい。

二十世紀に入り、心理学と精神医学を結ぶ新しい学問分野である臨床心理学が誕生した。第一の心理学はフロイトの精神分析による学問で、今日の心理療法（精神療法）になった。第二の心理学はワトソンなどの行動主義、客観的に観察できる行動を対象とした心理学である。第三の心理学はマズローやドイツのゴールドシュタインがとらえた人間性心理学である。そうして第四の心理学として、トランスパーソナル心理学が出てき

た。これは西洋心理学と東洋的靈性を創造的に融合したものである。そして一九九〇年代に入り、深層心理学と仏教の対話が再び活発になるのである。

○心理学 未我↓自我↓自己↓超(自)我 フロイト、マズロ

ー、ゴールドシュタイン

未意識↓意識↓無意識(個人的無意識、普遍的無意識(集合的無意識) ユング

○仏教 自我(我執)↓無我

【仏教】

【浄土真宗】

・仏教心理学・唯識の心理学 ・浄土心理学(真宗心理学)

・仏教ビハーラ ・真宗ビハーラ

・仏教カウンセリング ・真宗カウンセリング

○仏教(仏道)

・転迷開悟⇨迷いを転じて悟りを開く

解脱 成仏 涅槃 滅度 生死を超える 「煩惱即菩提」

「生死即涅槃」

○浄土真宗の教え

・阿弥陀如来の本願を信じ念仏を称えれば、現生に正定聚に住し、浄土へ往生して仏になる。後生の一大事。

「能発」念喜愛心 不断煩惱即涅槃 「惑染凡夫信心発 証知生死即涅槃」(正信念仏偈)

初期真宗教団の原風景

安藤 章 仁

『三河念仏相承日記』(以下『相承日記』と略称)は、真宗美術の宝庫といわれる三河地方において専修念仏の教えが初めて伝えられた状況と、その後の展開を記した史料で、奥書に貞治三年(一三六四)の年紀が記される。親鸞没後約百年の記録であるが、初期真宗教団の成立過程を伝える現存唯一の古記録として史料価値は高い。小論では『相承日記』の記述から初期真宗教団の原風景、すなわちその特徴を読み解いてみたい。

まず、初期真宗門侶の成立過程について『相承日記』は、「念仏」「法名」「出家」の三段階があったことを伝えている。詳細に関する記述はないが、「念仏」は入信の段階で俗名を用い、「法名」の下付は正式な信徒、「出家」は坊号が下付された道場坊主と考えられる。そして各段階が顕智聖(一二二六―一三二〇)による相伝であることを主張するところに本書の特徴がある。

次に初期真宗教団の構成について「念仏二入ル人数名帳」の記載内容から考えたい。名帳には三十二名の人名が記されるが、その内訳は下級荘官や有力名主層である「監帳」「庄司」「田俵」「渡」「検校」、坊号を持つ出家者、俗名の一般耕作農民、遊君(女性芸能者)である「御前」、名帳外に記載される土豪的領主の「権守」と多様な社会的階層によって構成されている。注目されるのは、名前の下に「二人」と書かれる十二組